



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の 特徴的な用法について (6)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋,未来, 佐藤,正光 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173523

中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る 唐詩の特徴的な用法について (6)

高橋 未来^{*1}・佐藤 正光^{*2}

中国古典学分野

(2021年9月15日受理)

要 旨

本稿は、唐詩の語彙における特殊な用法を分析するものである。唐宋から金元明の詩詞や戯曲などには、時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言が詠み込まれている。それはオーソドックスな意味とは異なるために、精確な解釈にはその特殊語彙（以下、異読と称する）の意味を把握することが必要となる。そこで平成27年度紀要より、異読の用法を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』（中華書局、2014）から唐詩の用例を中心に訳出し、検討を加えてきた。本稿では、中国語のピンイン表記によるDからFまでの14項目を取り上げて、唐詩の用例及び唐以前の用例も含めて訳出、検討を行った。

検討の結果、「闕」「端」といった、一つの語彙が方向詞、副詞、形容詞といった複数の異なる機能を持つ例が見出された。つまり、どの語義を詩に当てはめて解釈するかによって、一詩全体の意味が大きく異なるのである。全体を通して、杜甫と白居易の作品に好個の例が多く、対句と互文の用法に異読が多いことがわかる。

キーワード：唐詩，唐宋詞，異読，訓読，俗語，口語，語彙解釈

はじめに

唐詩の語彙には、しばしば時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言のたぐいが見られる。それらの語彙（以下、異読と称する）は一般的な意味とは異なるが、日本の伝統的な訓読に異読語彙の意味が含まれていない場合、その特殊な意味を捉えきれないという問題があった。そこで唐詩の精確な解釈をめざして、張相『詩詞曲語辭滙釈』（中華書局、1953）その他を再編成し、異読語彙を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』（中華書局、2014）から、唐詩の特殊な用例を訳出検討してきた（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について」、本紀要第67集、2016～佐藤正光・高橋未来・有木大輔・西村諭・長谷川真史・梁旭璋「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について（5）」、紀要第71集、2020）。またこの成果のうち、約200項目を『中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』翻訳稿』（東京学芸大学出版会、2020年3月）に発表した。

昨年度はコロナウイルスの影響により中断を余儀なくされたが、今年度より検討を再開することが可能となった。そこでこれまでに続き、以下に、唐代までの詩文における異読の用例を検討する。なお、唐詩の引用にはすべて『全唐詩』（中華書局、1960）を用いることとする。また異体字については、意味が異なる場合の

*1 大阪市立大学 文学部 言語文化学科 (558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138)

*2 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

み用いることとし、意味が同じ場合は原則として日本の常用漢字の新字体を用いている。

1. 当来 dānglái

将来。拾得¹「詩」其五十（『全唐詩』807）「不憂当来果，唯知造惡因（当来の果を憂えず，唯だ惡因^{いた}に造るを知るのみ）」。（高橋）

2. 第一 dìyī

甚だの意，最も，極めて。汪辟疆校録『唐人小説²』卷上沈既濟³『枕中記』「性頗奢蕩，甚好佚樂，後庭声色，皆第一綺麗（性は頗る奢蕩にして，甚だ佚樂を好み，後庭の声色，皆第一^{はなは}だ綺麗なり）」。（高橋）

3. 闢 dòu

①引くに同じ。「逗」に通じる。「逗」の項を見よ。

②湊，拼，合〔入声〕（あわせる）に同じ。合とは薬の調合や，合金をいう。李賀⁴「梁台古意⁵」（『全唐詩』卷393）「台前闢玉作蛟龍，緑粉掃天愁露湿（台前 玉を闢^{あわ}せて蛟龍を作り，緑粉 天を掃いて露の湿^{うる}おうを愁う）」，王琦注⁶に「木石鑲榫合縫之處謂之闢（木石の鑲榫合縫するの処，之を闢と謂う）」という。徐夔⁷「憶山中友人（山中の友人を憶う）」（『全唐詩』卷708）「闢開碧沼分明月，各領青天⁸占白雲（碧沼を闢せ開きて明月を分かち，各おの青天を領して白雲を占む）」，「闢開碧沼」とは両家が合わせて一つの池を開いたという。韋莊⁹「和鄭拾遺秋日感事一百韻（鄭拾遺の秋日事に感ず一百韻に和す）」（『全唐詩』卷697）「八珍羅膳府，五采闢筐牀（八珍 膳府に^{つら}羅ね，五采 筐牀に^{あわ}闢す）」，五采が揃うことをいう。

③紛れる，乱れる。韓愈¹⁰「初南食貽元十八協律（初めて南食して元十八協律に貽る）」（『全唐詩』卷341）「章拳馬甲柱，闢以怪自呈（章拳と馬甲柱と，闢^{まじ}りて怪を以て自ら呈す）」。章拳はたこ，馬甲柱は江珧柱（タイラギの貝柱）である，入り乱れて怪しげな姿を見せることをいう。

④対するに同じ。

⑤乗ずるに同じ。王建¹¹「醉後憶山中故人（酔後 山中の故人を憶う）」（『全唐詩』卷299）「遇晴須看月，闢健且登樓（晴るに遇いては須く月を見るべく，健なるに^{じょう}闢じては且く樓に登らんとす）」，闢は一に「聞」に作り，「聞」は乗じるに同じ。『詩詞曲語辭典』「聞」の項を見よ。「闢」はまた利用するという意味，「闢健」は壮健であることによってという意味である。『尊前集¹²』所収の王建「江南三台」に「闢身強健早為，頭白齒落難追（身の強健なるに^{じょう}闢じて早に為るも，頭白くして齒落つれば追ひ難し）」，『全唐詩』は「聞身」に作る¹³，意味は上に記す意味に同じ，体が強壮なことを利用するという。元稹¹⁴「連昌宮詞」（『全唐詩』卷419）「百官隊仗避岐薛，楊氏諸姨車闢風（百官の隊仗 岐薛¹⁵を避け，楊氏の諸姨 車 風^{じょう}に闢ず）」，闢風とは風に乗じるということである，風に乗る或いは風を追うという。

⑥突然，頓にに同じ。

⑦楽しみ戯れるの意。牛僧孺¹⁶「席上贈劉夢得（席上にて劉夢得に贈る）」（『全唐詩』卷466）「休論世上昇沈事，且闢樽前見在身（論ずるを休めよ世上の昇沈の事，且く闢^{しばら}しまん樽前 見在の身）」，闢は，享受するという意味，しばらく樽前で元気でいることを享受しよう，または樽前に元気でいるのを楽しもうという。これは黃庭堅¹⁷の詞によって証明できる。黃庭堅の詞「清平樂」（『全宋詞¹⁸』）「使君一笑眉開，新晴照酒尊來，且樂尊前見在，休思走馬章台（使君一たび笑いて眉開き，新晴 酒尊の來たるを照らす，且く樂まん尊

前に見在するを，馬章台に走るを思うを休めん），黃庭堅の詞は牛僧孺の詩を換骨奪胎し，そのまま「楽」の字に変えている，闘は楽に同じ。白居易¹⁹「代夢得吟（夢得に代わりて吟ず）」（『全唐詩』卷448）「世上爭先從盡（儘）汝，人間闘在不如吾（世上 先を争うは汝に従尽かす，人間 在るを闘しむは吾に如かず）」は夢得に代わって牛僧孺の詩の「闘見在」の意に答え，之を省略して「闘在」といった，「闘在」は「楽見在（元気でいることを楽しむ）」というのである。白居易「自題小園（自ら小園に題す）」（『全唐詩』卷459）「不闘門館華，不闘林園大。但闘為主人，一坐十余載。廻看甲乙第，列在都城内……主人安在哉，富貴去不廻……何如小園主，拄杖閑即來……以此聊自足，不羨大池台（門館の華なるを闘しせず，林園の大なるを闘しせず。但だ主人と為るを闘しむ，一たび坐してより十余載。廻りて甲乙の第を見るに，列して都城の内に在り……主人安く在りや，富貴去りて廻らず……何ぞ如かん小園の主，杖に拄えられて閑に即ち來たり……此を以て聊か自ら足れりとし，大池台を羨まず）」，この詩中にいう「闘」はまた「楽」である。園の華やかさを楽しせず，園の廣大さを楽しせず，ただ長らく園の主人となるのを楽しむという，起句に「不闘」といい，結句に「不羨」といい，内容はまさに一貫している。以上が楽しむという意味である。（高橋）

4. 端 duān

①准（かならず），真に，究めてに同じ。

②応に～すべし，須く～すべしに同じ。

③方向詞として用いて複数の方位を表すことができる。先端の意味に限らない。李白²⁰「送寶司馬貶宜春（寶司馬の宜春に貶めらるるを送る）」（『全唐詩』卷176）「闘雞金宮裏，射雁碧雲端（雞を闘わす 金宮の裏，雁を射る 碧雲の端）」，端と裏は互文である。杜甫²¹「垂老別（垂老の別）」（『全唐詩』卷217）「人生有離別，豈捫盛衰端²²（人生に離別有るも，豈に盛衰の端を捫ばんや）」，盛衰の間というのと同じ。駱賓王²³「疇昔篇」（『全唐詩』卷77）「遨遊灞水曲，風月洛城端（遨遊す 灞水の曲，風月 洛城の端）」，王維²⁴「奉和聖製御春明樓臨右相園亭賦樂賢詩應制（聖製の春明樓に御し右相の園亭に臨みて樂賢詩を賦す應制に和し奉る）」（『全唐詩』卷125）「商山原上碧，滻水林端素（商山の原上 碧にして，滻水 林端素し）」，また「送韋大夫東京留守（韋大夫の東京留守となるを送る）」（『全唐詩』卷125）「人外遺世慮，空端結遐心（人外 世慮を遺れ，空端 遐心を結ぶ）。以上は「中」，「間」の意味をなす。

端は上，前の方向も表す。宋之問²⁵「函谷関」（『全唐詩』卷53）「不從紫氣台端候，何得青華觀裏逢（紫氣台の端従り候わざれば，何ぞ青華觀の裏に逢うを得ん）。王勃²⁶「山亭夜宴（山亭にて夜宴す）」（『全唐詩』卷55）「清興殊未闌，林端照初景（清興 殊に未だ闌ならざるに，林端に初景照らす）。李白「古朗月行」（『全唐詩』卷163）「小時不識月，呼作白玉盤。又疑瑤台鏡，飛在白雲端（小時 月を識らず，呼びて白玉盤と作す。又た疑う 瑤台の鏡の，飛びて白雲の端に在るか）。祖詠²⁷「望終南余雪²⁸（終南の余雪を望む）」（『全唐詩』卷131）「終南陰嶺秀，積雪浮雲端（終南 陰嶺秀いで，積雪 浮雲の端）」，みな「台上」「林上」「雲上」に同じ。宋之問「景龍四年春祠海（景龍四年春，海を祠る）」（『全唐詩』卷51）「筵端接空曲，目外唯霧霧²⁹（筵端 空曲に接し，目外 唯だ霧霧）。王維「東溪玩月（東溪に月を玩ぶ）」（『全唐詩』卷127）「月從斷山口，遙吐柴門端（月は斷山の口従りし，遙かに吐わる柴門の端）」は「筵前」，「門前」に同じ。以上は「上」と「前」の意味である。

端はまた辺，畔の方向も示す。『先秦漢魏晉南北朝詩³⁰』魏詩卷10阮籍³¹「詠懷」其七十四「路端便娟子，但恐日月傾。焉見冥靈木，悠悠竟無形（路端 便娟なる子，但だ恐る日月の傾くを。焉くんぞ見ん冥靈の木，悠悠として竟に形無し）」，路端は路辺の意。孫逖³²「和常州崔使君食夜（常州の崔使君の寒食の夜に和す）」（『全唐詩』卷118）「無勞秉華燭，清月在南端（華燭を秉るに勞する無し，清月南端に在り）。孟浩然³³「陪張丞相登荊城樓因寄薊州張使君及浪泊戍主劉家（張丞相の荊城の樓に登るに陪し，因りて薊州の張使君及び浪泊³⁴の戍主の劉家に寄す）」（『全唐詩』卷160）「薊門天北畔，銅柱日南端（薊門 天北の畔，銅柱 日南の端）」，端と畔は互文である。盧象³⁵「家叔徵君東溪草堂（家叔の徵君の東溪の草堂）二首」其一（『全唐詩』卷122）「澗影生龍蛇，巖端翳檉梓（澗影 龍蛇生じ，巖端 檉梓翳う）」，これは草堂の位置をいい，

「巖の端」は「巖の畔」に同じ。孟雲卿³⁶「新安江上寄処士（新安江上 処士に寄す）」（『全唐詩』卷157）「嘯起青蘋末，吟囑白雲端（嘯い起こす 青蘋の末，吟じ囑る 白雲の端）」。以上は辺，畔の意である。

④副詞，特に，^{ことさら}故に。

㊦「端」が「特に」，「^{ことさら}故に」の意味を表す用例は，先秦時代に既に見られる。『睡虎地秦墓竹簡³⁷』法律答門「罪当重而端輕之，当輕而端重之，是謂『不直』（罪重きに当たるも端に之を輕んじ，輕きに当たるも端に之を重んず，是を「直ならず」と謂う）」，整理小組の注に引く『墨子』号令篇「其端失火以為乱事者，車裂（其れ端に失火して以て乱事を為す者は，車裂す）」。また『樂府詩集³⁸』卷30相和歌辞5魏明帝「短歌行」「翩翩春燕，端集余堂（翩翩たる春燕，端に余堂に集う）」も「特に」「故に」の意味である。

⑤多い，深い。程度を示す形容詞として用いる。謝莊³⁹「月賦（月の賦）」（『文選⁴⁰』卷13）「陳王初喪應，劉，端憂多暇（陳王初め應，劉⁴¹を喪い，^{ふか}端く憂いて暇多し）」，端と多は一句の中に見え，端憂の意味は「深く憂う」である。また「子夜歌」四十二首・其二十九（『樂府詩集』卷44）「歡從何処來，端然有憂色（歡は何れの処より來たる，端然として憂色有り）」，端然は「深深地（ふかく）」というのと同じ。張說⁴²「破陳樂詞二首」其一（『全唐詩』卷89）「正屬四方朝賀，端知万舞皇威（正屬に四方朝賀し，^{ふか}端く万舞の皇威を知る）」，意味はまた「深く知る」に同じ。白居易「渭村退居寄礼部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻（渭村に退居して礼部の崔侍郎，翰林の錢舍人に寄する詩一百韻）」（『全唐詩』卷438）「少睡知年長，端憂覺夜長（少しく睡りて年の長きを知り，^{ふか}端く憂いて夜の長きを覺ゆ）」，端と少は対になっている。また「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書（東南行一百韻。通州の元九侍御，澧州の李十一舍人，果州の崔二十二使君，開州の韋大員外，庾三十二補闕，杜十四拾遺，李二十助教員外，竇七校書に寄す）」（『全唐詩』卷439）「貧室如懸磬，端憂劇守株（貧室 磬を懸くるが如く，端憂 株を守るより劇し）」。

端憂を逆にすると憂端となる，つくりは異なるが意味は変わらない。杜甫「自京赴奉先縣詠懷五百字（京より奉先縣に赴く詠懷五百字）」（『全唐詩』卷216）「憂端齊終南，瀕洞不可掇（憂い^{ふか}端きこと終南に齊しく，瀕洞として^{ひう}掇う可からず）」，上の句は憂いの思いが深いことをいい，下の句は憂いの思いが広がることをいう。

〔朝端〕cháoduān 詩詞によく見られる。南北朝時代には尚書令を意味し，時に僕射をもいう。中央官僚のトップとの意。唐代以降は意味が薄れ，ただ朝廷を意味するようになった。張九齡⁴³「和裴侍中承恩拜掃旋轡途中有懷寄州縣官僚鄉國親故（裴侍中の恩を承けて拜掃し轡を旋らす途中，懷有りて州縣の官僚の郷國の親故に寄するに和す）」（『全唐詩』卷49）「天下稱賢相，朝端挹至公（天下は賢相を稱し，朝端 至公に挹す）」。

李父⁴⁴「故西台侍郎上官公挽歌（故の西台侍郎上官公の挽歌）」（『全唐詩』卷92）「宇内文儒重，朝端礼命優（宇内 文儒重んじ，朝端 礼命優る）」。

源乾曜⁴⁵「奉和聖製送張尚書巡辺（聖製の張尚書巡を辺に送るに和し奉る）」（『全唐詩』卷107）「天子挹英才，朝端出監撫（天子は英才を挹び，朝端 監撫出だす）」。

孟浩然「田園作（田園の作）」（『全唐詩』卷159）「鄉曲無知己，朝端乏親故（鄉曲に知己無く，朝端に親故乏し）」，上に上げた四例中，前の三例はなお宰相の意味を持つが，孟浩然の詩は「朝端」と「鄉曲」が対句となり，明らかに朝廷を意味する。（高橋）

5. 端正 duānzhèng

①うるわしい，美しい。唐の王諱⁴⁶「後庭怨」（『全唐詩』卷145）「君不見紅閨少女端正時，夭夭桃李仙容姿（君見ずや 紅閨の少女端正なる時，夭夭たる桃李 仙なる容姿）」。

顧況⁴⁷「梁広画花歌（梁広の花を画く歌）」（『全唐詩』卷265）「上元夫人最小女，頭面端正能言語（上元夫人 最も小なき女なり，頭面端正にして言語を能くす）」。

『敦煌變文集補編⁴⁸』維摩碎金「仮饒端正似潘安，擲果盈車人総会。四相遷移身滅後，空留名字也無常（仮饒い端正なること潘安に似るも，擲果車に^{おき}盈ちて人総て会す。四相遷移して身滅びし後，空しく名字を留むるも^な也た常無し）」，みな美しいとの意。龐蘊⁵⁰『龐居士詩⁵¹』卷下「慚愧一双眼，曾見数般人。端正亦不愛，丑陋亦不瞋（慚愧す一双眼の，曾て数般の人を見るを。端正なるも亦た愛せず，丑

陋なるも亦た^{いか}瞋らず)」、「端正」と「丑陋」が対に挙げられているので、意味は明らかである。

㊦『漢語大詞典⁵²』端正の条②に「整齐匀称（整然ととのっている）」とあり、『史記⁵³』「儀狀端正（儀狀端正なり）」、『搜神記⁵⁴』「端正婦人（端正なる婦人）」、顧況の詩⁵⁵「頭面端正（頭面は端正なり）」、『武王伐紂平話⁵⁶』「形容端正（形容は端正なり）」等の例を挙げる。按ずるに「端正」には「うるわしい、美しい」という意味があり、「整齐匀称」の引申義だが、全く同じ意味というわけではない。『漢書⁵⁷』外戚伝第67上・上官皇后に「(霍)安素与丁外人善，説外人曰『聞長主内女，安子容貌端正……』」((霍)安素は丁外人と善し，外人に説きて曰く「聞くならく長主は女を内ると，安の子は容貌端正にして……」)，これは容貌を指しており，整っているという意味にとどまらない。

②形容詞，特に月が丸いことを指す。韓愈「和崔舍人詠月二十韻（崔舍人の月を詠ずるに和す二十韻）」（『全唐詩』卷343）「三秋端正月，今夜出東溟（三秋 端正なる月，今夜 東溟に出づ）」。（高橋）

6. 断 duàn

① 尽きる，終わる，完まる，^{とど}まる。

〔唱断〕chàngduàn 歌い終わる。張祜⁵⁸「聴崔莒侍御葉家歌（崔莒侍御葉の家の歌を聴く）」（『全唐詩』卷511）「一声唱断無人和，触破秋雲直上天（一声唱い断わりて人の和する無く，秋雲を触破して直ちに天に上る）」。

〔吹断〕chuīduàn 吹き尽くす。李商隐⁵⁹「昨夜」（『全唐詩』540）「昨夜西池涼露滿，桂花吹断月中香（昨夜西池に涼露滿ち，桂花吹き断くす月中の香）」，吹断は，香りが漂い尽きたこと。

〔目断〕mùduàn 果てまで望み見る，望み尽くす。丘為⁶⁰「登潤州城（潤州城に登る）」（『全唐詩』卷129）「鄉山何處是，目断広陵西（郷山何れの處にかはある，目は断くす広陵の西）」，目断は「目極」に同じ，『楚辞⁶¹』招魂「目極千里（目は千里を極む）」の「目極」に同じ。また「目尽」に同じ，王維「寄荊州張中丞⁶²（荊州の張中丞に寄す）」（『全唐詩』卷126）「目尽南飛鳥⁶³（目は尽くす 南飛の鳥）」の「目尽」に同じ。李商隐「潭州」（『全唐詩』卷539）「目断故園人不至，松醪一醉与誰同（目は故園を断くすも人至らず，松醪 一醉 誰と同にかせん）」。

〔嘶断〕sīduàn いなき終わる。李商隐「無題」（『全唐詩』卷539）「白道縈迴入暮霞，斑駁嘶断七香車（白道 縈迴して暮霞に入り，斑駁 嘶き断わる七香車）」。

〔望断〕wàngduàn 望み尽くす，望み終わる。李商隐「曲江」（『全唐詩』卷541）「望断平時翠輦過，空聞子夜鬼悲歌（望み断くす 平時翠輦の過ぎりしを，空しく聞く 子夜に鬼の悲歌するを）」。

司空图⁶⁴「重陽阻雨（重陽に雨に阻まる）」（『全唐詩』卷633）「猶勝登高閑望断，孤煙殘照馬嘶回（猶お勝る 登高して閑に望み断くし，孤煙殘照 馬嘶きて回るに）」。

杜甫「孤雁」（『全唐詩』卷231）「望尽似猶見，哀多如更聞（望み尽くすも猶お見るに似，哀しみ多くして更に聞くが如し）」，尽は一に「断」に作る，「断」は尽に同じ。

〔心断〕xīnduàn 「目断」の用法と同じで，思って忘れないという意味，思い極まる或いは思い尽くす。元稹「送友封（友封に送る）」（『全唐詩』卷413）「心断洛陽三兩處，窈娘堤抱古天津（心に断くす洛陽の三兩處，窈娘堤は抱く 古天津⁶⁵）」。

李商隐「風雨」（『全唐詩』卷539）「心断新豊酒，銷愁斗幾千（心に断くす新豊の酒，愁いを銷すは斗幾千）」

また「聖女祠」（『全唐詩』卷540）「腸回楚国夢，心断漢宮巫（腸に回る楚国の夢，心に断くす漢宮の巫）」。

〔吟断〕yīnduàn 吟じ終える。李商隐「晋昌晚帰馬上贈（晋昌にて晩に帰りに馬上に贈る）」（『全唐詩』

卷541)「征南予更遠、吟断望郷台(征南 予 更に遠く、吟じ断くす望郷台)」。

[占断] zhànduàn 占め尽くす、または占めている。秦韜玉⁶⁶「牡丹」(『全唐詩』卷670)「図把一春皆占断、故⁶⁷留三月始教開(一春を把りて皆占め断くさんことを図るも、故に留むること三月 始めて開かしむ)」。吳融⁶⁸「杏花」(『全唐詩』卷686)「粉薄紅輕掩斂羞、花中占断得風流(粉薄く紅軽やかにして羞を掩斂し、花中占め断くして風流を得)」。(高橋)

7. 断当 duàndàng

相談する、相談して決定する。

[断] duàn 相談して決める。周賀⁶⁹「留別南徐故人(南徐の故人に留別す)」(『全唐詩』卷503)「未断却来約、且伸臨去情(未だ断せず却来の約、且く伸べん 去るに臨むの情)」、却来は、再び来ること。約束するに同じ。(高橋)

8. 断送 duànsòng

①過ぐす、^{わた}度る。二字を連用して、過ぐす、また度るとの意。断と送の二字は意味も同じで、連用して一語となり、意味も同じである。韓愈「遊城南十六首・遣興(興を遣る)」(『全唐詩』卷343)「断送一生惟有酒、尋思百計不如閑(一生を断送るに惟だ酒有り、百計を尋思するは閑なるに如かず)」。この生涯を過ぐす、この生涯を送るという意味。また「断」「送」の項を見よ。

②葬送する。

③ひきおこす、送り出す。送り出すという意味の用例は、白居易「同夢得和思黯見贈来詩中先叙三人同讌之歡次有歎鬢髮漸衰嫌孫子催老之意因酬妍唱兼吟鄙懷(夢得と共に思黯の贈り来たられしに和す。詩中先づ三人同讌の歡を叙し、次いで鬢髮の漸く衰うるを歎じ、孫子の老を催すを嫌うの意有り。因りて妍唱に酬い、兼ねて鄙懷を吟ず)」(『全唐詩』卷457)「留連灯下明猶飲、断送樽前倒即休(灯下に留連して明けて猶お飲み、樽前に断送して倒れて即ち休む)」、酔いつぶれてさらに飲興に送り出すという。

④「推送」(促す)の送、また送迎の送の意味。

⑤品物を贈る。もとは動詞だが、名詞のように用いる。

[断] duàn ①過ぐす、^{わた}度る。杜荀鶴⁷⁰「江南逢李先輩(江南にて李先輩に逢う)」(『全唐詩』卷691)「歲月消於酒、平生断在詩(歲月 酒に消くし、平生 断ぐすは詩に在り)」、この生涯を送る、我が生涯を送るに同じ。杜甫「曲江三章章五句」其三(『全唐詩』卷216)「自断此生休問天、杜曲幸有桑麻田。故將移住南山辺、短衣匹馬隨李広、看射猛虎終殘年(自ら此の生を断えて天に問うを休めん、杜曲幸いに桑麻の田有り。故に將に南山の辺に移住せん、短衣匹馬 李広に随い、猛虎を射るを看て殘年を終えんとす)」、「断此生」は、この生をおえる、いわゆる残りの年月を終えるということ。この生涯を送ると同じ意味。これは辛棄疾の詞によって証明できる。辛棄疾⁷¹「水調歌頭」(『全宋詞』)「断吾生、左持蟹、右持杯(吾が生を断うるに、左に蟹を持し、右に杯を持す)」、按ずるに『晋書⁷²』卷49畢卓伝に「右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生矣(右手に酒杯を持して、左手に蟹螯を持し、酒船の中に拍浮して、便ち一生を了うるに足る)」。辛棄疾の詞は畢卓の「了一生」の典故を用い、さらに杜甫の詩の「断此生」の文を踏襲したのは、その意味が本来同じであることによる。これにより、杜甫の詩にいう「自断此生」は自らこの生を了えるというのと同じ、またこの生涯を送る、またはこの生活を送るという意味であることがわかる。「断送」の項①を見よ。

②葬送する。

[送] sòng^{わた}①渡る，過ぐす。杜甫「水檻遺心（水檻にて心を遣る）二首」其二（『全唐詩』卷227）「浅把涓涓酒，深憑送此生（浅く把る涓涓たる酒，深く憑りて此の生を送る）」，「送此生」は，この生涯を送る，あるいはこの生活を送るに同じ。「断送」の項の①を見よ。

②葬送する。（高橋）

9. 对 duì

①当たる。～の場所に面する，～の時に当たる。李白「贈范金鄉⁷³二首（范金郷に贈る二首）」其二（『全唐詩』卷168）「范宰不買名，弦歌对前楹（范宰 名を買わず，弦歌 前楹に対たる）」，また「南都行」（『全唐詩』卷166）「高楼对紫陌，甲第連青山（高楼 紫陌に対たり，甲第 青山に連なる）」。杜甫「一百五日夜对月（一百五日の夜 月に对す）」（『全唐詩』卷224）「無家对寒食，有淚如金波（家無くして寒食に対たり，涙有りて金波の如し）」，また「謁先主廟（先主の廟に謁す）」（『全唐詩』卷229）「如何对搖落，況乃久風塵（如何ぞ搖落に対たらん，況んや乃ち風塵に久しきをや）」，趙彦材の注に「搖落，秋也（搖落は，秋なり）」⁷⁴，「对搖落」は正に秋日に当たるという意味。高適⁷⁵「宋中別司功叔各賦一物得商丘（宋中にて司功叔に別れ各おの一物を賦して商丘を得）」（『全唐詩』卷214）「干戈悲昔事，墟落对窮年（干戈 昔事を悲しみ，墟落 窮年に対たる）」，窮年は暮年のこと。高適「宋中十首」其五（『全唐詩』卷212）「登高臨旧国，懷古对窮秋（登高して旧国に臨み，懷古して窮秋に対たる）」，窮秋とは，深秋である。

②如し，同じようだ，ちょうど～のようだ。李白「与謝良輔遊涇川陵巖寺（謝良輔と涇川の陵巖寺に遊ぶ）」（『全唐詩』卷179）「乘君素舸泛涇西，宛似雲門对若溪（君と素舸に乗りて涇西に泛べば，宛も雲門に似たりて若溪の対し）」，陵巖寺はあたかも雲門寺のようで，涇川は若耶溪と同じようだという。雲門寺と若耶溪はともに会稽山の名所である。杜甫「天池」（『全唐詩』卷229）「直对巫山峽⁷⁶，兼疑夏禹功（直だ巫山の峽の対く，兼ねて夏禹の功の疑し）」，「直对」は「就像（ちょうど似ている）」，「疑」は「似る」の意味。高適「送李侍御赴安西（李侍御の安西に赴くを送る）」（『全唐詩』卷214）「行子对飛蓬，金鞭指鉄驄（行子 飛蓬の対く，金鞭 鉄驄を指す）」。白居易「問秋光（秋光を問う）」（『全唐詩』卷445）「淡交唯对水，老伴無如鶴（淡交 唯だ水の対く，老伴 鶴の如き無し）」，この句は「对」を「如」と対にしている。

③横に並ぶ。杜甫「同元使君春⁷⁷陵行（元使君の春陵行に同ず）」（『全唐詩』卷222）「兩章对秋月，一字偕華星（兩章 秋月に對び，一字 華星と偕ぶ）」。また「偕」の項を見よ。

[偕] xié横に並ぶ。杜甫「夏日歎（夏日の歎）」（『全唐詩』卷217）「眇然貞觀初，難与数子偕（眇然たり貞觀の初め，数子と偕ぶこと難し）」，また「同元使君春⁷⁸陵行（元使君の春陵行に同ず）」（『全唐詩』卷222）「兩章对秋月，一字偕華星（兩章 秋月に對び，一字 華星と偕ぶ）」，「对」の項③を見よ。（高橋）

10. 鈍 dùn

①形容詞。呆かまたは蠢か。盧仝⁷⁹「揚州送伯齡過江（揚州にて伯齡の江を過ぐるを送る）」（『全唐詩』卷388）「不唧溜⁸⁰鈍漢，何由通姓名（唧溜ならざる鈍漢，何に由りてか姓名を通ぜしめん）」，唧溜は賢いこと，鈍漢は「呆かな漢」という意味。「不唧溜」と「鈍漢」は反対の両面から「漢」を形容している。（高橋）

11. 惡 è

怒る。李建勳⁸¹「毆妓（妓を毆つ）」（『全唐詩』卷739）「恨枕堆雲髻，啼襟搵月黃。起来猶忍惡，剪破繡鴛

鴛 (恨枕 雲髻^{うづたか} 堆く、啼襟 月の黄なるに^{そま}搥る。起き来たりて猶^{いか}お悪るを忍び、剪り破る繡の鴛鴦)」、忍悪とは、怒るを忍ぶこと、下の句が注になる。(高橋)

12. 惡臥 èwò

熟睡するの意。杜甫「茅屋為秋風所破歌 (茅屋 秋風の破る所と為る歌)」(『全唐詩』卷219)「布衾多年冷似鉄、驕兒惡臥踏裏裂 (布衾 多年 冷たきこと鉄に似たり、驕兒 惡臥して踏裏に裂く)」, 子どもが熟睡していて、掛け布団の内側を足で破いたことをいう。注釈者のほとんどが「子どもの寝相が悪く、みだりに蹴る」と解しているが、意を尽くしていない。また「惡睡」の項を見よ。

〔惡睡〕èshuì 熟睡すること。鄭谷⁸²「贈劉神童 (劉神童に贈る)」(『全唐詩』卷676)「習読在前生、僧談足可明。還家雖解喜、登第未知榮。時果曾霑賜、春闕不任情⁸³。燈前猶惡睡、寤語誦書聲 (習読するは前生に在り、僧談 明らかにすべきに足る。家に還りては解喜すと雖も、登第して未だ榮を知らず。時果 曾て霑賜せらるるも、春闕⁸⁴ 情に任せず。燈前^{すて} 猶に惡睡するも、寤語 書を誦するの声のごとし)」, 『太平広記⁸⁵』卷175幼敏「劉神童」にこの詩を引いて「惡睡」を「惡臥」に作り、当詩の出典について「劉神童者、昭宗朝以鄉薦擢第、時年六歲矣。帝詔于便殿復驗之、神童朗誦經書、初無微誤。帝大驚、因掇御盤果實賜之……故都官鄭谷贈之詩 (劉神童は、昭宗朝のとき郷薦を以て第に擢んでらる、時に年六歳なり。帝は便殿に復た之を驗さんことを詔す、神童は經書を朗誦するに、^{もと}初より微誤無し。帝大いに驚きて、因りて御盤の果實を掇いて之に賜う……故に都官鄭谷之に詩を贈る)」という。尾聯の「猶」は「既に」の意⁸⁶、大意は劉神童が試験を受けた後家に帰るや、疲れを覚えて、灯りを手にした時には既に眠りに落ちていたが、夢の中での寝言も全て書を読む声だったということである。もし「みだりに蹴る、寝相が悪い」と解すると、下の句とつじつまがあわない、寝言は熟睡してこそ言うからである。(高橋)

13. 翻 fān

①副詞。反って、却って。転折の語気を表す。語気の転折がやや重い時は「反」に相当し、やや軽いときは「却」に相当する。李白「于闐採花 (于闐にて花を採る)」(『全唐詩』卷163)「丹青能令醜者妍、無塩翻在深宮裏 (丹青 能く醜き者を妍ならしめ、無塩⁸⁷ ^{かえ}翻つて深宮^{うち}の裏に在り)」, これは「反って (にもかかわらず)」の意味。岑参⁸⁸「衙郡守還 (衙郡守還る)」(『全唐詩』卷198)「世事何反覆、一身難可料。頭白翻折腰、還家私自笑 (世事何ぞ反つて覆わる、一身料るべきこと難し。頭白くして^{かえ}翻つて腰を折り、家に還りて^{ひそ}私に自ら笑う)」, 意味は上の例に同じ。杜甫「聞斛斯六官未婦 (斛斯六官未だ婦らずと聞く)」(『全唐詩』卷226)「故人南郡去、去索作碑錢。本売文為活、翻令室倒懸。(故人南郡に去り、去りて索む碑を作るの錢。本と文を売って活を為す、^{かえ}翻つて室をして倒^{さかさ}まに懸からしむ)」, ここでは転折の語気がやや軽いので、「却って (～だが)」の意味。權德輿⁸⁹「薄命篇」(『全唐詩』卷328)「寧知燕趙娉婷子、翻嫁幽并游俠兒 (寧ぞ知らん燕趙の娉婷子、翻つて幽并の游俠兒に嫁ぐを)」。戴叔倫⁹⁰「過龍灣五王閣訪友人不遇 (龍灣の五王閣を過ぎりて友人を訪ぬるも遇わず)」(『全唐詩』卷273)「青林依古塔、虛館靜柴扉。坐久思題字、翻憐柿葉稀 (青林 古塔に依り、虚館 柴扉静なり。坐すること久しくして題字を思い、^{かえ}翻つて憐れむ柿葉の稀なるを)」。劉駕⁹¹「出門 (門を出づ)」(『全唐詩』卷585)「出門羨他人、奔走如得塗。翻思他人意、与我或不殊 (門を出でては他人を羨み、奔走すること塗を得るが如し。^{かえ}翻つて思う他人の意、我と或いは殊ならずと)」, 意味はみな「却って」である。劉言史⁹²「代別後夢別 (別後夢に別るに代う)」(『全唐詩』卷469)「翻思夢裏苦、却恨覺來遲 (^{かえ}翻つて思う夢裏に苦しむも、却つて恨む覺め來たることの遅きを)。

②動詞。模写する。白居易「琵琶行⁹³」(『全唐詩』卷435)「莫辞更坐彈一曲、為君翻作琵琶行 (辞する莫かれ更に坐して一曲を弾ぜんことを、君が為に^ま翻ねて琵琶行を作らん)」, これは曲を模写して詞章を成すという。竇鞏⁹⁴「少婦詞」(『全唐詩』卷271)「夢繞天山外、愁翻錦字中 (夢に繞る天山の外、愁いて^{うつ}翻す錦字⁹⁵の中)」。權德輿「晚秋陪崔閣老張秘監閣老苗考功同遊昊天觀時楊閣老新直未滿以詩見寄斐然酬和有愧燕音

（晩秋に崔閣老，張秘監閣老，苗考功に陪して共に昊天觀に遊びし時，楊閣老新たに直して未だ満たず，詩を以て寄せらる，斐然として酬和するも燕音を愧づる有り）」（『全唐詩』卷328）「麗句翻紅葉，佳期限紫微（麗句 紅葉を翻し，佳期 紫微に限る）。許渾⁹⁶「贈裴處士（裴處士に贈る）」（『全唐詩』卷528）「字形翻鳥跡，詩調合猿声（字形 鳥跡を翻し，詩調 猿声に合す）」。

③詩詞と音楽は深く結びついているので，翻はまた曲調を模倣すること，または歌い演奏することを表す。孟浩然「美人分香（美人香を分かつ）」（『全唐詩』卷160）「舞学平陽態，歌翻子夜声（舞は学ぶ平陽の態，歌は翻う子夜の声）」，模倣するとの意。盧綸⁹⁷「宴席賦得姚美人拍箏歌（宴席にて姚美人の拍箏歌を賦し得たり）」（『全唐詩』卷277）「昭陽伴裏最聰明，出到人間纔長成。遙知禁曲難翻處，猶是君王說小名（昭陽の伴裏 最も聰明なり，出でて人間に到りて纔かに長成す。遙かに知る禁曲の翻い難き處，猶お是れ君王 小名を説ぶ）。王建「霓裳曲⁹⁸十首」其四（『全唐詩』卷301）「旋翻新譜声初起⁹⁹，除却梨園未教人（旋ち新譜を翻いて声初めて起き，梨園を除却せられて未だ人に教えず）。崔道融¹⁰⁰「羯鼓」（『全唐詩』卷714）「寂寞鑾輿斜谷裏，是誰翻得雨淋鈴（寂寞たる鑾輿 斜谷の裏，是れ誰か翻い得たる雨淋鈴）」，雨淋鈴は玄宗が蜀に赴く途中に作った曲の名で，翻はみな模写するとの意。唐彦謙¹⁰¹「留別四首」其二（『全唐詩』卷671）「鼓吹翻新調，都亭酒正酣（鼓吹 新調を翻で，都亭 酒正に酣なり）」，演奏するとの意。楊巨源¹⁰²「聽李憑彈箏篴（李憑の箏篴を弾ずるを聴く）二首」其一（『全唐詩』卷333）「君王聽樂梨園煖，翻到雲門第幾声（君王 樂を聴きて梨園煖かに，雲門を翻で到りて第だ幾声）」，雲門は曲調の名である。

〔翻然〕 fānrán 詩中の「翻然」の一語も，それとは反対に，～であるのに，との意味で，「翻然悔悟（翻然として悔い改める）」という成語における，急に変わるとの意味とは異なる。杜甫「諸將五首」其二（『全唐詩』卷230）「韓公本意築三城，擬絕天驕拔漢旌。豈謂盡煩回紇馬，翻然遠救朔方兵（韓公の本意 三城を築きしは，天驕の漢旌を抜くを絶たんと擬すればなり。豈に謂わんや 尽く回紇の馬を煩わして，翻然 遠く朔方の兵を救わんとは）」，これは朔方節度使郭子儀が回鶻の兵力を借りて難を逃れたことを諷刺しており，翻然が転折の語気を表すことは明らかである。李頎¹⁰³「緩歌行」（『全唐詩』卷133）「結交杜陵輕薄子，謂言可生復可死。一沈一浮会有時，棄我翻然如脱屣（交を結ぶ 杜陵の輕薄子，言いて謂う生くべく復た死すべしと。一沈一浮会たま時有り，我を棄つるも翻然 屣を脱ぐが如し）。高適「奉酬北海李太守丈人夏日平陰亭（北海の李太守丈人の夏日の平陰亭に酬い奉る）」（『全唐詩』卷211）「盛烈播南史，雄詞豁東溟。誰謂整隼旟，翻然憶柴局（盛烈 南史を播し，雄詞 東溟を豁く。誰か謂わん隼旟を整うるも，翻然 柴局を憶うと）。また高適「贈別王十七書記¹⁰⁴（王十七書記に贈別す）」（『全唐詩』卷211）「自言愛水石，本欲親蘭蕙。何意薄松筠，翻然重菅蒯（自ら言う水石を愛し，本と蘭蕙に親しまんと欲すと。何ぞ意わん松筠を薄んじ，翻然 菅蒯を重んずと）。裴夷直¹⁰⁶「春色滿皇州（春色皇州に満つ）」（『全唐詩』卷513）「氛氲直城北，駘蕩曲江頭。今日靈台下，翻然卻是愁（氛氲たり直城北，駘蕩たり曲江の頭。今日靈台の下，翻然 却つて是れ愁う）。」（高橋）

14. 紛 fēn

程度が深いことを表す。異なる上下の文中に「甚だ」「重ねて」「屢しば」「久しく」などというのに相当する。杜甫「奉贈鮮于京兆二十韻（鮮于京兆に贈り奉る二十韻）」（『全唐詩』卷224）「義声紛感激，敗績自逡巡（義声 紛だ感激するも，敗績 自ら逡巡す）」，これは「甚だ」の意。また杜甫「贈李十五丈別（李十五丈に贈りて別る）」（『全唐詩』卷221）「多病紛倚薄，少留改歲年（多病 紛しば倚薄す，少しく留まれば歳年改まらんとす）」，これは「屢しば」の意。倚薄は，とどまるとの意，「紛倚薄」は「たびたびとどまる」ということである。杜甫「寄劉峽州伯華使君四十韻（劉峽州伯華使君に寄す四十韻）」（『全唐詩』卷230）「年華紛已矣，世故莽相仍（年華は紛しく已み，世故は莽として相い仍る）」，これは「久しい」の意。劉禹錫¹⁰⁷「登司馬錯古城（司馬錯の古城に登る）」（『全唐詩』卷355）「楚塞鬱重疊，蠻溪紛詰曲（楚塞 鬱として重疊たり，蠻溪 紛だ詰曲す）」，これは「甚だ」である。劉禹錫「遊桃源（桃源に遊ぶ）一百韻」（『全唐詩』卷355）「昏旦遞明媚，煙嵐紛委積（昏旦 遞いに明媚なり，煙嵐 紛なりて委積す）」，これは「重なる」である。（高橋）

おわりに

以上の用例には、たとえば「闕」「端」など、一語のうちに方向詞、副詞、形容詞という様々な機能を持つ語が見出された。このことは、どの語義を詩に当てはめて解釈するかによって、一詩全体の意味が大きく異なることを意味している。また、「闕」の「楽しみ戯れる」との意味は、例えば『大漢和辞典』や『漢語大詞典』といった大型の辞典類には記載されておらず、非常に特殊な用法である。改めて、詩の解釈の難しさと異読語彙の把握の重要性を痛感させられる。その他、「断」「送」は一語でそれぞれ「過ごす」「葬送する」の意味を持つが、「断送」と連用する場合、「過ごす」「葬送する」とそれ以外の意味をも表すことは留意すべきであろう。全体を通して窺われるのは、杜甫及び白居易作品に好個の例が多いことと、対句と互文の用法に異読が多いことである。

今後も唐詩の用例を中心として訳出と検討とを進め、異読語彙の全体像を把握することを目標とする。あわせて、個別の詩人における用法や、時代や地方に共通する傾向、語義の変遷などをも検討するつもりである。しかし用例が膨大なため、誤読の可能性もある。ご示教を仰ぐ次第である。

注

- 1 拾得（生卒年及び籍貫不詳）、寒山とともに天台山国清寺の豊干禪師の弟子。
- 2 『唐人小説』（上海古籍出版社、1978）。
- 3 沈既濟（生卒年不詳）、蘇州呉（江蘇省蘇州市）のひと。
- 4 李賀（790-816）、字は長吉、昌谷（河南省）のひと。
- 5 『全唐詩』は「梁台古愁」に作る。
- 6 唐・李賀、清・王琦等評注『三家評注李長吉歌詩』（上海古籍出版社、1998）。但し『三家評注李長吉歌詩』は「樺」を「準」に作る。
- 7 徐夤（生卒年不詳）、徐寅のこと、寅は一に夤に作る。字は昭夢、莆田（福建省）のひと。
- 8 『全唐詩』は「山」に作る。
- 9 韋莊（836？-910）、字は端己、京兆杜陵（陝西省西安市東南）のひと。
- 10 韓愈（768-824）、字は退之、諡は文公、鄧州南陽（河南省孟州市）のひと。
- 11 王建（？-830？）、字は仲初、潁川（河南省許昌市）のひと。
- 12 『四庫全書』（上海古籍出版社、1987）集部十・詩詞曲類二所収、但し『四庫全書』は「且為」に作る。
- 13 『全唐詩』巻301。
- 14 元稹（779-831）、字は微之、河南洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 15 唐の玄宗の弟で、岐王李範と薛王李業。
- 16 牛僧孺（780-848または849）、字は思黯、安定鶡觜（甘肅省靈台県）のひと。
- 17 黄庭堅（1045-1105）、字は魯直、号は山谷道人、分寧（江西省九江市）のひと。
- 18 唐圭璋『全宋詞』（中華書局、1965）。
- 19 白居易（772-846）、字は樂天、号は香山居士。原籍は太原（山西省）、鄭州新鄭（河南省）のひと。
- 20 李白（701-762）、字は太白、号は青蓮居士。西域に生まれ、幼少期に蜀の青蓮郷（四川省江油県）に移り住んだと言われる。
- 21 杜甫（712-770）、字は子美、原籍は湖北襄陽（湖北省襄陽市）、河南府鞏県（河南省鞏義市）のひと。
- 22 『全唐詩』は「離合」を「離別」に、「盛衰」を「垂老」に作る。
- 23 駱賓王（640？-684？）、婺州義烏県（浙江省金華市義烏市）のひと。
- 24 王維（699-759）、字は摩詰、河東（山西省永濟市）のひと。
- 25 宋之問（656？-712？）、字は延清、汾州西河（山西省汾陽市）のひと。
- 26 王勃（650-676？）、字は子安、絳州龍門（山西省河津市）のひと。
- 27 祖詠（生卒年不詳）、洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 28 『前唐詩』は「終南望余雪」につくる。
- 29 『全唐詩』は「霧霧」を「霧霧」に作る。

- 30 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局，1983）。
- 31 阮籍（210-263），字は嗣宗，陳留郡尉氏（河南省開封市）のひと。
- 32 孫逖（696-761），博州武水（山東省聊城市東昌府区沙鎮）のひと。
- 33 孟浩然（689-740），名は浩，浩然是字，号は鹿門处士，襄陽（湖北省襄陽市）のひと。
- 34 浪泊は嶺南道の地名である。
- 35 盧象（生卒年不詳），字は緯卿，范陽（河北省涿県）のひとで，汶水（山東省）に住んだ。
- 36 孟雲卿（725 ? - ? ），平昌（山東省商河県）のひと。
- 37 睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社，1990）。但し注は他の文に付した注である。
- 38 北宋・郭茂倩『樂府詩集』（中華書局，1979）。
- 39 謝莊（421-466），字は希逸，陳郡陽夏（河南省太康県）のひと。
- 40 梁・蕭統編，唐・李善注『文選』（上海古籍出版社，1986）。
- 41 「応，劉」は応瑒と劉楨とを意味する（李善注）。
- 42 張説（667-730），字は道濟（一説に説之），洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 43 張九齡（678-740），字は子寿，韶州曲江県（広東省韶関市）のひと。
- 44 李父（657-716），元の名は尚真，一説に字が尚真ともいう，趙州房子（河北省臨城県）のひと。
- 45 源乾曜（? -731），相州臨漳（河北省臨漳県）のひと。
- 46 王綽（生卒年及び籍貫不詳），開元年間（713-741）の進士。
- 47 顧況（727 ? -816 ? ），字は逋翁，華陽山人，悲翁と号した。蘇州（浙江省蘇州市）のひと。
- 48 周紹良等編『敦煌變文集補編』（北京大学出版社，1989）。
- 49 『敦煌變文集補編』は「摘菓盈車人惣会」に作る。意味は同じ。
- 50 龐藎（生卒年不詳），字は徳玄，衡州衡陽（湖南省衡陽市）のひと，禪宗の居士。
- 51 唐・龐藎撰，唐・于頔編集『龐居士語録・龐居士詩』（東京大学付属東洋文化研究所蔵，出版社不明），筆者未見。
- 52 羅竹風主編『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社，1995）。
- 53 前漢・司馬遷『史記』卷121 儒林列伝・公孫弘伝（中華書局，1959）。
- 54 晋・干宝，汪紹楹校注『搜神記』卷16（古小説叢刊，中華書局，1979）。
- 55 「端正」①の顧況「梁広画花歌」（『全唐詩』卷265）に同じ。
- 56 『平話武王伐紂書』卷上（豫章書社，1981）。
- 57 漢・班固『漢書』（中華書局，1962）。
- 58 張祐（782 ? -852），字は承吉，清河（河北省邢台市清河県）のひと，南陽（河南省南陽市）に住んだ。
- 59 李商隱（812 ? -858），字は義山，号は玉谿生，懷州河内（河南省沁陽県）のひと。
- 60 丘為（703 ? -798 ? ），蘇州嘉興（浙江省）のひと。
- 61 宋・洪興祖『楚辭補注』（中華書局，1983）。
- 62 『全唐詩』は「丞相」に作る。
- 63 全唐詩は「雁」に作る。
- 64 司空図（837-908），字は表聖，河中郡虞郷（山西省永濟県）のひと。
- 65 洛陽城内の天津橋のこと。
- 66 秦韜王（生卒年不詳），字は仲明，湖南または京兆（陝西省西安市）のひと。
- 67 『全唐詩』は「固」に作る。
- 68 呉融（生卒年不詳），字は子華，越州（浙江省紹興市）のひと。
- 69 周賀（生卒年不詳），字は南卿，東洛（河南省洛陽市）のひと。
- 70 杜荀鶴（846 ? -906 ? ），字は彥之，九華人と号した。池州石埭（安徽省石台県）のひと。
- 71 辛棄疾（1140-1207），字は幼安，号は稼軒，歴城（山東省済南市）のひと。
- 72 唐・房玄齡等『晋書』（中華書局，1974）。
- 73 『全唐詩』は「卿」に作る。
- 74 宋・郭知達『九家集注杜詩』（『四庫全書珍本四集』，台湾商務印書館，1973），但し『四庫全書』は「秋時也」に作る。
- 75 高適（700-765），字は達夫，渤海（河北省景県）のひと。

- 76 『全唐詩』は「出」に作る。
- 77 『全唐詩』は「春」に作る。
- 78 『全唐詩』は「春」に作る。
- 79 盧仝（?-835）、字は不明、号は玉川子。范陽（河北省）のひと。
- 80 『全唐詩』は「溜」に作る。
- 81 李建勳（872-952）、字は致堯、広陵（江蘇省揚州市）のひと。
- 82 鄭谷（851?-910?）、字は守愚、袁州宜春（江西宜春市）のひと。
- 83 『全唐詩』は「春闈不挂情」に作る。
- 84 進士に登第後、姓名を登録して省に入ること。
- 85 宋・李昉『太平広記』（人民文学出版社、1959）。
- 86 『詩詞曲語辞典』738頁「猶」の項③に見える。
- 87 戦国斉の宣王の夫人、鍾離春のこと。無塩の出身で容姿が醜かったが、自ら宣王に目通りして国の大事を説き、認められて皇后となった（前漢・劉向『新序』雑事）。
- 88 岑参（715?-770）、字は不明、南陽（河南省南陽市）のひと。
- 89 権徳輿（758-815）、字は載之、天水略陽（甘肅省秦安県）のひと。
- 90 戴叔倫（732-789）、字は幼公（または次公）、潤州金壇（江蘇省常州市）のひと。
- 91 劉駕（822-?）、字は司南、江東のひと。
- 92 『全唐詩』は長孫佐輔の詩に作る。
- 93 『全唐詩』は「琵琶引」に作る。
- 94 竇鞏（771-830）、字は友封、号は嘯嘯、京兆金城（陝西省興平）のひと。
- 95 錦字書のこと。前秦の竇滔の妻蘇氏は遠方にいる夫を思い、錦に詩を織り込んで送った（『晋書』巻96列女列伝・竇滔妻蘇氏）。
- 96 許渾（791?-858?）、字は用晦、潤州丹陽（江蘇省丹陽県）のひと。
- 97 盧綸（739-799）、字は允言、河中府蒲県（山西省臨汾市蒲県）のひと。
- 98 『全唐詩』は「霓裳詞」に作る。
- 99 『全唐詩』は「足」に作る。
- 100 崔道融（?-907?）、荊州江陵（湖北省江陵県）のひと。
- 101 唐彦謙（?-893?）、字は茂業、并州晋陽（山西省太原市）のひと。
- 102 楊巨源（755-?）、字は景山、河中（山西省永濟西）のひと。
- 103 李頎（生卒年不詳）、趙郡（河北省趙県）のひとで、潁陽（河南省登封市）に住んだ。
- 104 『全唐詩』は「管記」に作る。
- 105 草の名で、縄を作るもの。賤しい人物や物にたとえる。
- 106 裴夷直（生卒年不詳）、字は礼卿、呉（江蘇省蘇州市）のひと。
- 107 劉禹錫（772-842）、字は夢得、中山（河北省定州市）のひと、一説に彭城（江蘇省徐州市）のひと。
- 108 『全唐詩』は「分」に作る。

有关中华书局编辑部编《诗词曲语辞辞典》所收 唐诗词汇的特殊用法的研究 (6)

高 桥 未 来^{*1}・佐 藤 正 光^{*2}

中国古典学分野

(2021年9月15日受理)

摘 要

本文分析了唐诗词汇中的特殊用法。从唐宋到金元明的诗剧中，都融入了时代，地域特征，社会阶层所创造的俗语，口语，方言。既然不同于正统的意思，就需要掌握特殊词汇的意思（以下简称“异读”），才能准确解读。因此，从2015年度发表的《东京学艺大学纪要・人文社会科学系 I》第67集中，对中华书局主编的《诗词曲语辞辞典》（中华书局，2014）中的唐诗实例进行了翻译和考察，其中包含了许多不同读法的用法。本文选取汉语拼音从D到F的14个条目，进行了包括唐诗实例和唐前实例在内的翻译和考查。作为考查的结果，我们发现了“斗”和“端”等一个词汇具有多个不同的功能，例如方向词，副词和形容词。换句话说，一首诗的整体意义因应用于诗歌和解释的意义而异。纵观整体，可以看出杜甫和白居易的作品有很多（异读）很好的例子，在对联和互句的用法上也有很多不同的读法。

关键词：唐诗，唐宋词，异读，训读，俗语，口语，词汇

*1 大阪市立大学 文学部 语言文化学科 (558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138)

*2 东京学艺大学 日语・日本文学研究讲座 中国古典学分野 (184-8501 东京都小金井市贯井北町4-1-1)